

第2報告：

ハプスブルク帝国期ハンガリーにおける マイノリティ企業家たち

高田 茂臣

大東文化大学教授

I はじめに

おそらくハンガリーの気質と言えるのだろうか、ハンガリー人には昔から商業や金融業を見下す傾向があり、この傾向は長い間消えることがなかった。このため19世紀前半には、ブダとペスト（ペシュト：引用者）の金融業、製造業に携わる人々、裕福な商人や職人は、そのほとんどが非マジャル系の人々で占められていた（ルカーチ、1991、122頁¹⁾。

今日ではハンガリーの企業家層の社会史的研究が本格化し（Bácskai, 1989；Lengyel, 1989）、個人銀行の営業実態を解明したものや（Kövér, 2012）、企業家を列伝的に取り上げ、その経営行動と業績から彼らの歴史的特性を探ったものもある（Sebők, 2004）。以下ではこれらの研究や個別モノグラフを手がかりに、近代ハンガリーにおける移民・少数民族出身企業家の経歴・業績を整理・総括し、その歴史的意義を明らかにしたい。

II 「ギリシア人」

ハプスブルク、オスマン両帝国がカルロヴィッツ条約を結び講和した1699年、都市小売商

業ギルドであるペシュト市民商業組合（Pesti Polgári Kereskedelmi Testület）が結成された。当初の加入資格はカトリック教徒に限定されており、後になってプロテスタントや正教徒にも拡大されたが、ユダヤ教徒は依然として排除されていた。遠隔地商業はギルド規制の外におかれたため、ここに「ギリシア商人」（正教徒の商人）の活動余地が生まれたのである。

「東欧のロートシルト」といわれ、商人銀行家シナ・シモン（Sina Simon, 1753-1822）、シナ・ジュルジュ・シモン（Sina György Simon, 1783-1856）、シナ・シモン（1810-1876）3代を輩出したギリシア系最大の企業家シナ家はオスマン帝国（現アルバニア）ヴォスコポヤ（モスコポル）出身のアルメニア人で、ハプスブルク帝国の兵站や政府への信用供与に携わり、後に帰化して男爵に叙爵された。

同家は18世紀以来、同族および同郷人とのパートナーシップを通じてオスマン帝国の出身地とウィーンやペシュトとを結ぶ棉、皮革、煙草、羊毛等の交易や金融に従事し、その蓄積をもってハプスブルク帝国の都市・農村大土地所有者（計13.8万ヘクタール）へと転化した。それには1851～1864年間に所有していたペシュト近郊のゲデレー所領も含まれる。

ハンガリーの産業化投資も行い、シナ・ジュルジュ・シモンは1830～40年代の「改革期」

を指導した政治家、伯爵セーチェニ・イシュトヴァーン (Széchenyi István, 1791-1860) の盟友として、王国初の蒸気鉄道となったハンガリー中央鉄道 (1846 年)、ブダとペシュトを分断するドナウ河に架かる最初の常設橋「鎖橋」(1849 年) や、ティサ川治水にも出資している (Lanier, 1998)。

マンノー・デメテル (Manno Demeter, 1754-1815)、マンノー・イシュトヴァーン (Manno István, 1812-1888) 父子もオスマン帝国 (マケドニア旧ユーゴスラビア共和国) ピトラ出身で、同様なオスマン帝国・ハプスブルク帝国間の交易・金融活動に従事し、ハンガリーにおける不動産・産業化投資を行った。マンノー・イシュトヴァーンはペシュト・ハンガリー商業銀行取締役にもなっている。

Ⅲ ユダヤ人

ザーロモン・マイアー・ロートシルト (Salomon Mayer Freiherr von Rothschild, 1774-1855) はロートシルト家初代マイアー・アムシェル (Mayer Amschel Rothschild, 1744-1812) の次男としてフランクフルト・アム・マインに生まれ、1819 年にウィーンへ来住する。翌年、当地で個人銀行を設立し、やがて宮廷・政府に対する信用供与の功績により男爵を与えられた。

こうした帝都におけるロートシルト家の活動を背景に、ハンガリーでも 1840 年代から商工業、金融業の発展が加速する。1840 年法律第 29 号はユダヤ人に居住・営業の自由を認め、1860 年の二月勅令はユダヤ人に土地の取得を認めた。ユダヤ人が企業家として活動する条件が整えられたのである。彼らの多くが地方の農産物商人からスタートし、ロートシルト家とも関係しながら、やがて製粉業を機軸として多角的産業企業家に成長した (高田, 2008)。

1859 年、ペシュトに欧州最大のドハーニ街シナゴグを建立したのはユダヤ教の改革派ネオログであり、彼らは正統派オーソドックスに比べて進取の気性に富んでいた。ネオログやキ

リスト教への改宗者を中心に、オーストリア＝ハンガリー帝国が成立する 1867 年以降、ユダヤ系企業家の台頭が加速する。

ユダヤ系企業家はたんに経営者・資本家として活動するだけでなく、ブダペシュト商工会議所 (1850 年)、ブダペシュト商品・証券取引所 (1864 年) やハンガリー工業企業家全国連盟 (1902 年) といった公益経済団体の設立・運営にも参与した。くわえて下院議員や上院議員としての公共への奉仕が評価され、オーストリア、ハンガリー両国で男爵に叙爵されるものも現れる。

ゴールドベルガー・フェレンツ (Goldberger Ferenc, 1750-1834) は北ドイツのゴールドベルク出身で、1784 年にオーブダでゴールドベルガー藍染工場を創業した。19 世紀になるとペシュトに商品倉庫、デブレツェン、ウィーン、セゲドに支店が開設され、1905 年には同族株式会社となる。ゴールドベルガー家はネオログであり、最後の社主ゴールドベルガー・レオー (Goldberger Leó, 1878-1945) はゲシュタポにより同社を追われ、マウトハウゼン強制収容所で死亡した。

ウルマン家はボジョニ (ブラチスラヴァ) 出身の商人銀行家で、ウルマン・モーリツ (Ullmann Móric, 1782-1847) はペシュト・ハンガリー商業銀行 (1841 年) やハンガリー中央鉄道の創設に参与し、不動産投資も行った。ロートシルト家代理人であったが、カトリックに改宗している。

オーストリア国立銀行副総裁やドナウ汽船会社取締役会長を務めたヴォディアネル・モール (Wodianer Mór, 1810-1885) を出したヴォディアネル家も改宗ユダヤ人 (カトリック) で、ボヘミアから大平原のパーチ＝ボドログ県、さらにセゲドへと移住し、羊毛・煙草・穀物の交易や金融業に従事してきた。ペシュト、ウィーンに進出後、両国で男爵を与えられている。ウルマン、ヴォディアネル両家はハンガリー来住後に縁戚関係となった。

亜麻商人ヴァールマン・マイアー・ヴォルフ

(Wahrmann Mayer Wolf, 1795-1859) の息子ヴァー
ールマン・モール (Wahrmann Mór, 1832-1892)
は個人銀行家で、1863年にパンノニア蒸気製
粉取締役会長、1888年にガンツ鑄鉄・機械工
場取締役会長となる。公職では1869年にユダ
ヤ人初の下院議員に選ばれ、1891年にはブダ
ペシュト商工会議所会頭に選任された。本人は
ネオログだったが、息子の代でカトリックに改
宗する。

フィッシャー・モール (Fischer Mór, 1799-
1880) は1839年、ヘレンド磁器工房 (1826年
創業) の社主となった。彼の下、高級ディナー
セットの補充メーカーとして発展の機会をつか
んだヘレンド社は、高級磁器のクラフト生産に
特化し、宮廷や貴族などの庇護を受けてオリジ
ナルデザインを確立させるとともに、万国博を
製品マーケティングに最大限活用した (高田,
2015b)。

クラウス・マイアー (Krausz Mayer, 1809-
1894)、クラウス・ラヨシュ (Krausz Lajos,
1843-1905)、クラウス・イジドール (Krausz Iz-
idor, 1854-1920) 父子はドナウ河以西トルナ県
出身のネオログで、穀物取引から蒸留酒製造を
手がけ、1880年にはギゼッラ蒸気製粉を創業
して社主となった。

コーネル・アドルフ (Kohner Adolf, 1815-
1860) はザクセン、ボヘミアを経て1830年代
末にペシュトへ来住し、羽毛・穀物商を開業し
た。息子コーネル・ジグモンド (Kohner Zsig-
mond, 1840-1908) は1879年にペシュト・ハン
ガリー商業銀行取締役副会長、1892年に商人
団体ペシュト・ロイド協会会長、1894年にエ
ルジェーベト蒸気製粉取締役副会長に選任され
る一方、個人として農場経営や産業・地方鉄道
投資にも取り組んだ。コーネル家はネオログで
あったが男爵に叙爵され、子孫はのちにカナダ
へ亡命した (Hlbocsányi, 2012)。

ヴァイス家はモラヴィア出身の小商人であっ
た。ヴァイス・アドルフ (Weiss B. Adolf, 1807-
1877) はペシュトで生まれている。穀物取引で
富を築いた彼は、ブダペシュト第一蒸気製粉の

共同設立者となった。息子のヴァイス・マンフ
レード (Weiss Manfréd, 1857-1922) は1882年、
ブダペシュトのフェレンツヴァーロシュに軍需
缶詰工場を立ち上げた。ブリキ缶を自前で製造
したことが、兵器部門への多角化につながった。

弾薬筒の製造は1886年に始めていたが、
1892年から93年にかけて、ドナウ河の中州・
チェペル島 (現在はブダペシュトの市区) に弾薬
工場を建設した。ここを拠点に弾倉、弾薬筒や
弾丸の生産へと本格進出する。ヴァイス・マン
フレード製作所は部品内製化のため、銅精錬所、
鑄造所、圧延工場等をつぎつぎと併設してい
き、20世紀初頭には、二重帝国最大規模の「死の
商人」へと発展した。その功績で第一次大戦中
に上院議員となり、ネオログであったが男爵を
与えられている (Varga, 2016)。

ドイチュ家もナポレオン戦争の穀物好況期に
ドナウ河以西のクーセグから大平原のアラドへ
移住してきた、もとはモラヴィア出身の小商人
であった。ドイチュ・イグナツ (Deutsch
Ignác, 1803-1873) は1852年、事業拠点をアラ
ドからペシュトへ移した。

彼と息子のドイチュ・ベルナート (Deutsch
Bernát, 1826-1893) が1856年に設立したドイ
チュ商会は、穀物取引のほか、銀行・保険業、鉄
道業へも進出し、1865年設立のコンコルディア
蒸気製粉を経営支配した。1880年代には、
ボヘミアから技術を導入して製糖業へ事業を拡
大し、大平原での甜菜糖生産に先鞭をつけた。

ドイチュ・ベルナートの甥ハトヴァニ=ドイ
チュ・シャーンドル (Hatvany-Deutsch Sándor,
1852-1913) は、1895年にハンガリー製糖業者
全国協会会長に選ばれ、また1902年にはハン
ガリー工業企業家全国連盟の創設に際しコリ
ン・フェレンツ (Chorin Ferenc, 1842-1925) 会
長の下で副会長を引き受けるなど、業界利益の
取りまとめ役としても重要な役割を担った。第
一次大戦前に上院議員となり、ネオログであっ
たが男爵を与えられている (Koncz, 1986)。

コリン・フェレンツはアラド出身の改宗ユダ
ヤ人で、弁護士から下院議員に当選した。経済

界では専門経営者としてシャルゴータリヤーン炭鉱取締役会長を務め、上述のハンガリー工業企業家全国連盟初代会長や上院議員にも選ばれている。同名の息子コリン・フェレンツ(1879-1964)も弁護士からシャルゴータリヤーン炭鉱取締役会長となり、さらにはハンガリー工業企業家全国連盟会長や上院議員と、両大戦間に父と同様のキャリアを辿った。

コルンフェルト・ジグモンド(Kornfeld Zsigmond, 1852-1909)はボヘミア出身の銀行家で、専門経営者として長くハンガリー総合信用銀行頭取・取締役会長を務め、公職ではブダペシュト商品・証券取引所理事長や上院議員を歴任し、男爵に叙爵された。本人はネオオログだったが、息子コルンフェルト・モーリツ(Kornfeld Móric, 1882-1967)の代でカトリックに改宗している。コルンフェルト・モーリツも専門経営者としてガンツ社やヴァイス・マンフレード製作所の取締役を務めた。

ヴァイス、ドイツユ、コリン、コルンフェルトの4家はハンガリー来住後に縁戚関係となり、進歩的文化人となったドイツユ家の子孫を除き、第二次大戦以降にスイス、ポルトガル、米国へ亡命している²⁾。

父がボヘミア出身のラーンツイ・レオー(Lánczy Leó, 1852-1921)は改宗ユダヤ人(カルヴァン派)で、専門経営者として長くペシュト・ハンガリー商業銀行頭取・取締役会長を務め、公職でもブダペシュト商工会議所会頭、下院議員、上院議員を歴任した。

IV ドイツ人・スイス人

マルヴェュー・ケレステーイ(Malvieux Keresztély, 1783-1866)はウィーン出身の銀行家で、ユグノーの末裔(カルヴァン派)であった。1831年にペシュトへ来住し、彼の没後1869年に設立されたハンガリー割引・為替銀行は両替店の後身である。

ガンツ・アブラハム(Ganz Ábrahám, 1814-1867)はチューリヒ州エンブラハ出身の

カルヴァン派で、1841年にペシュトへ来住し、1844年にガンツ社を創業した。彼は叩き上げの職人から独立を果たし、1850年代以降に飛躍を成し遂げた。ガンツの成功の機会は、発展への技術革新(冷硬鑄造法の導入)を敢行した時に、全欧的鉄道ブームによりその製品(鉄道車輪)に対する需要の激増が到来したことであった。

アイヒライター・アントル(Eichleiter Antal, 1831-1902)とメクヴァルト・アンドラーシュ(Mechwart András, 1834-1907)は、1858年から1859年にかけてガンツ社に採用された学卒の技師である。アイヒライターはバイエルン王国アウクスブルク出身で、創業者没後の1869年、専門経営者としてガンツ社取締役副会長となる。

メクヴァルトもバイエルン王国シュヴァインフルト出身で、1859年にペシュトへ来住し、1874年に専門経営者としてガンツ社社長となる。彼が開発したロール製粉機は、1873年恐慌後における鉄道車輪の不振をカバーするとともに、ガンツ社の業績を拡大させた。1870年代末以降、鉄道車輛や電機・内燃機関等の「新産業」への多角化を指導する(高田, 2006)³⁾。

キューネ・エデ(Kühne Ede, 1839-1903)は自由ハンザ都市ハンブルク出身で、1862年にハンガリーへ来住し、ドナウ河以西のモション(モションマジャローヴァール)で農業機械工場を創業する。ここでは播種機、鉄犁、馬鋤、脱穀機等が製造され、ブダペシュト、デブレツェン、テメシュヴァール(ティミショアラ)に支店が設けられた。創業者没後の1908年、事業は株式会社に改組されている。

ハゲンマッヘル・ヘンリク(Haggenmacher Henrik, 1827-1917)、ハゲンマッヘル・カーロイ(Haggenmacher Károly, 1935-1921)兄弟に始まるハゲンマッヘル家はチューリヒ州ヴィンタートゥール出身のカルヴァン派で、ハンガリー来住後は製粉業やビール醸造業の経営者・資本家となった(Koncz, 1986)。子孫はベルギーへ亡命している。

アントン・ドレーア(Anton Dreher, 1810-

1863；ハンガリー語名ドレヘル・アントル Dreher Antal) はニーダーエースタライヒ州シュヴェヒャートのビール醸造家であり、死の前年にペシュト郊外クーバーニャ（現在はブダペシュトの市区）でビール工場を取得する。事業を引き継ぎ、クーバーニャ工場を成長させたのは、同名の息子ドレヘル・アントル（1849-1921）である。

「ドレーア」。それは、帝国時代に一世を風靡したビールである。ウィーンの醸造家アントン・ドレーアが1836年に、ウィーンの東の小邑シュヴェヒャートの醸造工場を引き継いで、当時ボヘミアで開発された下面発酵ビールを量産する。彼はのちに「ウィーンのビール王」と呼ばれるほど、彼の「ドレーア」ビールは急成長し、帝国一円に販路を広げた。しかし、帝国崩壊とともに醸造所は解体。もはやオーストリアに「ドレーア」ビールはない。ところが、かつての帝国領に、資本こそ違うものの「ドレーア」の名は今も残っている。ここトリエステに一つ。そしてハンガリーでは、国民的なビールとして今も健在だ（加賀美，1997，102頁）。

ハゲンマッヘル家とドレヘル家はハンガリー来住後に縁戚関係となり、両家の事業は両大戦間に統合された。

ハンガリーのガストロノミーを築いたのも外来の企業家たちである。グンデル・ヤーノシュ（Gundel János, 1844-1915）はバイエルン王国アンスバッハ出身のルター派で、1857年にペシュトへ来住し息子グンデル・カーロイ（Gundel Károly, 1883-1956）の代に現存する最高級ハンガリーレストラン「グンデル」のオーナーになっている。

ジェルボー・エミル（Gerbeaud Emil, 1854-1919）はジュネーヴ出身のカトリック教徒で、1884年にハンガリーへ来住し、ブダペシュトの最高級カフェ・コンフェクショナリー「ジェルボー」の店主となった。

V イギリス人

ロバート・ホワイトヘッド（Robert Whitehead, 1823-1905）はランカシャー出身のスウェーデンボリ派で、製図工として徒弟教育を受けた後にボルトンからマルセイユ、ミラノ、トリエステを経て1856年、フィウメへ来住した。当地で専門経営者を経て自身の魚雷工場を創業するのは1875年であった。

1866年開発のホワイトヘッド魚雷は最初の自動推進式魚雷であり、二重帝国のほかイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア等の主要国海軍へ納入された。ホワイトヘッド社は創業者没後の1906年、英国ヴィッカーズ・アームストロング社に買収される。

VI おわりに

ハブスブルク帝国東半部（ハンガリー）のマジヨリティは主にカトリック教徒であるマジャル人貴族層で、彼らは政官界を牛耳っていた。

他方、ハンガリー経済近代化の主要な担い手はマジャル人ではなく、社会の限界的位置にいたアウトサイダー出身のマイノリティであった。経済界ではマジヨリティだった彼らは、それぞれのネットワークに支えられながら事業を拡大していった。閥閥は原則として同一民族ないし出身地から形成されたが、改宗ユダヤ人と大貴族の通婚もみられた。こうして、銀行・大企業の顔として取締役会長に迎えられることも多かったマジャル人大貴族・政治家と席を並べ、上流社会の一員として迎えられたのである。

両大戦間期までは上記人脈が連続するが、第二次大戦中のユダヤ人迫害と戦後の社会主義国有化でほとんどの子孫が西欧・北米へ亡命して上流社会全体が閉幕する。また、体制転換期の民営化に伴う旧国営大企業の衰退・消滅もあり、ハンガリー近代化を担った企業・企業家たちの系譜の多くが途絶えてしまった。

注

- 1) ドナウ河に沿って集合都市圏を形成していた王国自由都市ベシュト、王国自由都市ブダと市場町オーブダは、1873年1月をもって首都ブダベシュトに統一される。
- 2) ハトヴァニ=ドイチュ・シャンドルの息子ハトヴァニ・ラヨシュ (Hatvany Lajos, 1880-1961) は1908年に文芸誌『Nyugat (西方)』の創刊に携わり、第一次大戦直後のハンガリー革命に参加する。革命挫折後はウィーンへ亡命し、一時帰国をはさみ西欧各地を転々とした。第二次大戦後ハンガリーに定住し、コシュート賞 (文化勲章) や科学アカデミー会員に選ばれた。
- 3) のちにガンツ社フィウメ (リエカ) 海洋造船所 (1911年取得) は二重帝国海軍の兵器廠として、水雷艇、機雷敷設艦、駆逐艦、潜水艦や高速巡洋艦等を建造した。両大戦間にハンガリー王国摂政となる提督ホルティ・ミクローシュ (Horthy Miklós, 1868-1957) が第一次大戦中に指揮した高速巡洋艦「ノヴァーラ」4,000トン、および同型艦「ヘルゴランド」は同造船所が建造。さらに1914年1月には、テゲトフ級 (弩級) 戦艦「聖イシュトヴァーン」20,000トンを完成させた。この戦艦には、主要装備としてシュコダ社製 30.5 cm 砲 12門が取り付けられていた。

参考文献

- 加賀美雅弘 (1997) 『ハプスブルク帝国を旅する』講談社現代新書。
- 鈴木光長編 (1891) 『保氏水雷自叙伝』水交社。
- 高田茂臣 (2006) 「19世紀ハンガリーにおける革新的企業家活動——ガンツ鑄鉄・機械工場の創業と発展の事例に即して」『企業家研究』第3号, 1-16頁。
- 高田茂臣 (2008) 『19世紀ハンガリーの産業革命——ハンガリー資本主義像の再検討』大東文化大学経営研究所。
- 高田茂臣 (2015a) 「19世紀ハンガリーにおける鉄道および関連工業の発展」『経営論集』(大東文化大学) 第28・29合併号, 135-148頁。
- 高田茂臣 (2015b) 「19世紀ハンガリー磁器産業における企業家活動——ヘレンド社の戦略」『経済研究』(大東文化大学) 第28号, 13-21頁。
- ルカーチ, ジョン著, 早稲田みか訳 (1991) 『ブダペストの世紀末——都市と文化の歴史的肖像』白水社。
- Bácskai, Vera (1989) *A vállalkozók előfutárai: Nagykereskedők a reformkori Pesten*, Budapest: Magvető Kiadó.
- Dombrády, Lóránd et al. (2016) *A magyar hadiipar története a kezdetektől napjainkig, 1880-2015*, Bu-

- dapest: Zrínyi Kiadó.
- Fokasz, Nikosz (szerk.) (2012) *Görög diaszpóra Közép-Európában*, Budapest: Új Mandátum Könyvkiadó.
- Gelléri, Mór (1887) *A magyar ipar úttörői: élet és jellemrajzok*, Budapest: Dobrowsky és Franke.
- Hlbocsányi, Norbert (2012) "A Kohner család vállalkozásai," *Tanulmányok Budapest múltjából*, 37. K., 43-76.
- Koncz, Katalin E. (1986) "Vergleich der Unternehmensstrategien von zwei Grossunternehmerfamilien: die Familien Haggenmacher und Hatvany-Deutsch," in Vera Bácskai (Hg.), *Bürgertum und bürgerliche Entwicklung in Mittel- und Osteuropa*, Bd. 1, Budapest: Akademisches Forschungszentrum für Mittel- und Osteuropa an der Karl Marx Universität für Wirtschaftswissenschaften.
- Kövér, György (2012) *A pesti City öröksége. Banktörténeti tanulmányok*, Budapest: Budapest Főváros Levéltára.
- Lanier, Amelie (1998) *Die Geschichte des Bank- und Handelshauses Sina*, Frankfurt am Main und New York: Peter Lang.
- Lengyel, György (1989) *Vállalkozók, bankárok, kereskedők: A magyar gazdasági elit a 19. században és a 20. század első felében*, Budapest: Magvető Kiadó.
- McCagg, William O. (1972) *Jewish Nobles and Geniuses in Modern Hungary*, New York: Columbia University Press.
- Patai, Raphael (1996) *The Jews of Hungary: History, Culture, Psychology*, Detroit: Wayne State University Press.
- Sebők, Marcell (szerk.) (2004) *Sokszínű kapitalizmus: pályaképek a magyar tőkés fejlődés aranykorából*, Budapest: HVG Kiadói Rt.
- Varga, László (2016) *A csepeli csoda. Weiss Manfréd és vállalata a Monarchiában*, Budapest: Budapest Főváros Levéltára.

Minority Entrepreneurs in Hungary during the Habsburg Monarchy Era

by Shigeomi Takada

This paper is a survey of careers and achievements of immigrant entrepreneurs and ethnic minorities in modern Hungary, as well as their historical significance.

The Greek merchants engaged in trade and financial activities between the Ottoman Empire and the Habsburg Monarchy. They invested also in real estate and industry in Hungary. Many of the Jewish entrepreneurs first appeared as merchants of agricultural products in rural areas. They later expanded into multi-activity entrepreneurs based on milling industry in Budapest. These minority entrepreneurs, including German, Swiss and British nationals, dominated Hungarian business. They developed their activities by supporting each other networks.

To conclude, the entrepreneurs who played an important role for economic modernization in Hungary during the Habsburg Monarchy era were not Magyars, but rather minorities from abroad who occupied a marginal position in society.
